

上海手話における人称代名詞のコピー：機能的な観点から

ジャン・シャオチェン

(中国・復旦大学)

現代口語中国語において、人称代名詞が1つの文において、文頭と文末の2度現れることがある。たとえば、*Ni gan shenme ni?* “You do what you.” この現象は他の口語言語にはそれほど頻繁には見られない。しかし、手話言語においては、この現象は非常にありふれたものである。文献においても、この人称代名詞のコピーは歴史的に関係を持たない多くの手話言語、つまりアメリカ手話、オランダ手話、オーストラリア手話、日本手話などで観察されている。上海手話（中国手話の変種）を用いる38名の生え抜きのろう者から収集した2時間の自然発話のデータに基づき、他の手話言語と同様に、上海手話にも人称代名詞のコピーが存在することが明らかになった。その統語的な分布の観点からは、コピーされる代名詞は、主語、埋め込まれた主語、もしくは目的語のいずれかであった。音韻的な特徴としては、明らかな短縮や長化はなく、瞬き、休止、頷きのような通常のイントネーションの切れ目もなかった。これまでの人称代名詞のコピーに関する研究では、3つの主要な説明が提案されている。つまり、これらのコピーされた代名詞は、(1) 焦点化／強調の標識、(2) 一致の標識、そして(3) 右方転位として機能しているというものである、しかしながら、これらの提案は、主としてこの現象の統語的な形式に基づくもので、その機能は無視している。したがって、われわれは機能的な観点に立ち戻る必要がある。発表者は、空間的な指示を通じてそれらの視覚的な卓越を支持することによって、文末の代名詞が、会話の受け手が会話の焦点に対する注意を向けることを保証することを助けるという Felix (2012) に同意する。その一方で、発表者は、人称代名詞のコピーは、話し手の独白や会話における肯定的／否定的な感情を、コンテキストと同様に、幸福、崇拜、親切、憎しみ、軽蔑などの感情に関する手話記号や、微笑み、頷き、眉のひそめなどの手を使わない手話記号とともに用いることであらわすための戦略であるという議論を行う。最後に発表者は上海手話と音声中国語における人称代名詞のコピーの用例の比較を行う。形態と機能において両者は非常に類似しているように見えるが、それらのモダリティーが異なるのだから、同一視してはならないというのが結論である。

キーワード：人称代名詞のコピー、上海手話、感情表現機能